

# 日照不足に伴う農作物の技術対策情報 (第2号)

平成21年8月12日  
福島県いわき農林事務所

7月31日に、福島地方气象台より「日照不足と低温に関する福島県気象情報第3号」が発表され、梅雨前線やオホーツク海高気圧の影響で日照時間の少ない状態が続いています。また、東北太平洋側では向こう1ヶ月の日照時間が少ない状態が続く見込みとなっています。

## 【水 稲】

(現在の生育状況)

- ・ 6月～7月中旬にかけて、平坦部、山間部とも生育はやや早めに経過しました。しかし、7月下旬以降、やや低温・日照不足であったため、生育はやや停滞しました。
- ・ 出穂期は、平坦部のコシヒカリで平年並の8月13日、山間部のひとめぼれで平年よりやや早い8月6日でした。
- ・ 出穂は、平坦部山間部とも出穂始めから穂揃い期までの期間が例年より長く要しています。
- ・ 現在は、コシヒカリが穂ばらみ末期から出穂期、ひとめぼれは、出穂期から穂揃期となっており、穂いもちの感染がしやすい時期となっています。
- ・ 草丈は平年並～やや短く、茎数は平年並からやや多く経過しています。
- ・ 葉いもちは、すでに発生が確認され、7月下旬以降感染に好適な気象条件が出現しているため、今後、穂いもち発生が心配されます。

(今後の技術対策)

### 1 穂いもち対策

- ・ 出穂直後は籾が最も感染しやすく、穂首、枝梗の順となります。籾や枝梗は濡れやすく、結露時間が長いため、出穂期以降の連続した降雨は穂いもちの感染を助長します。
- ・ 止葉、次葉に発生した葉いもち病斑は、穂いもちの主要な伝染源となります。止葉、次葉の発生状況には特に注意し、発生が見られたら早急に散布剤(粉剤や液剤等)で防除してください。
- ・ 穂いもちの潜伏期間は、籾いもちで5～8日、穂首いもちで9～12日、枝梗いもちで7～10日であり、籾いもちの潜伏期間が最も短く、発病が早いので、この上に形成した胞子による二次感染も被害を拡大します。
- ・ 葉いもちの感染好適条件が7月下旬以降に周期的に出現し、発生拡大が心配されます。
- ・ 現在、葉いもちの発生が見られないほ場であっても、穂いもち防除を行っていない場合は、穂いもちが発生する恐れがあるので、散布剤により穂ばらみ末期と穂揃期に防除を行ってください。
- ・ 穂いもちに対する薬剤の散布効果は感染前が最も効果的であり、感染後2日以上経過すると発病抑制効果が認められないと考えられるので、薬剤散布は適期に遅れないで行いましょう。
- ・ 穂いもちの粒剤による予防散布を行った場合でも多発が懸念される場合は、散布剤による追加防除を行ってください。また、箱施用剤のみの実施である場合には、今後効果が切れてくることが考えられるので穂揃期に散布剤による防除を行ってください。
- ・ 一般的に農薬を散布して2から3時間経過して乾く状態になれば、防除効果が認められるので、長雨のため防除適期を失う恐れのある場合でも、晴れ間をみて散布を行ってください。

## 2 水管理

- ・出穂から登熟初期にかけて浅水管理とします。
- ・その後は間断灌漑を行い、出穂35日後に落水します。早期落水は乳白粒の原因となります。

## 【大豆】

(現在の生育状況)

開花期は平年並からやや早くなりました。生育は、全体的には概ね良好で経過しています。

(今後の管理)

- ・降雨が続く場合、排水路の見回りや排水溝の整備と手直しを行い、表面水や明きよの滞水を早急にほ場外に排水しましょう。
- ・紫斑病は、降雨等による多湿条件で発病が多くなるので、開花期後20日頃に、莢に薬剤が十分付着するように散布しましょう。

## 【野菜】

(今後の技術対策)

### 1 日照不足時の栽培管理

- (1) 追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないようにしましょう。
- (2) ハウスの場合は、適正な温湿度管理に努め、病害を予防しましょう。
- (3) 日照不足条件下では作物が軟弱徒長ぎみに生育します。黄化葉や過密葉、病葉は随時摘除するとともに、着果負担が大きい果菜類では草勢に応じて摘果しましょう。

### 2 排水対策

雨が続いた場合、ほ場に過剰な水分が停滞しないよう、畦間の高低や明渠、側溝などを確認しましょう。過湿による根痛みは、草勢低下・病害の原因になります。

### 3 病害対策

日照不足等の下では軟弱徒長ぎみの生育となり、草勢が低下し病気が発生しやすいので、気象の推移と生育状況をみながら適正な防除に努めましょう。

また、過繁茂の黄化葉や老化葉は摘葉し、風通しを良くしましょう。

### 4 主な品目の技術対策

- (1) きゅうり：べと病、褐斑病等の発生が多くなるので防除に努めましょう。また、不良果を摘果し、草勢維持を図りましょう。枝の動きは緩慢となるので、側枝の摘芯は強く行なわないようにしましょう。
- (2) トマト：追肥は、窒素過多にならないように少量ずつ施用し、草勢維持に努めましょう。また、灰色かび病、葉かび病、疫病が発生しやすいので、薬剤散布や花かす(花弁)除去により防除しましょう。ハウス栽培では換気を図り、多湿状態にならないようにしましょう。
- (3) さやいんげん：多湿による灰色かび病、炭そ病等の発生に注意しましょう。根は過湿に弱いので排水対策を徹底しましょう。
- (4) いちご：鉢上げが終わらない方は、早めに行いましょう。うどんこ病の発生が多いため、防除に努めましょう。また、炭そ病が発生し易いので被害株の抜き取りと防除に努めましょう。
- (5) ねぎ：秋冬ねぎについては、アザミウマ類の発生が増えています。乾燥時と降雨時に合わせて薬剤を選定しましょう。また、軟腐病の発生時期ですので、適切に防除しましょう。

- (6) アスパラガス：茎枯病の発生が多くなるので防除に努めましょう。茎枯病が発生した場合は、被害茎葉を地際部から抜き取り焼却します。また、調整後の穂先のトロケに注意しましょう。
- (7) ブロッコリー：播種～育苗時期となっています。発芽開始後に被覆資材の除去が遅れると徒長するので注意しましょう。日照不足下での夕方かん水は徒長につながるのを避け、軸足のしっかりした苗作りを心がけましょう。

## 【果 樹】

(日照不足による果樹の生育に及ぼす影響)

- ・光合成の抑制により、果実肥大や糖度上昇が抑制されます。
- ・果皮色よりも果肉の成熟が早まります(果肉先行)。
- ・病気の感染や発生を助長します。

(今後の技術対策)

### 1 共通事項

降雨が続く場合は、果実品質や樹勢低下、病害の発生を回避するため、積極的に明きょを掘り排水に努めましょう。

### 2 なし

#### (1) 日照条件改善

誘引などにより樹冠内部の日当たりの確保、風通しを良好にしましょう。

#### (2) 適正な着果管理

樹勢や果実肥大等の状況に応じた着果管理を行いましょう。

「幸水」では、収穫前の樹上選果として、小玉果や著しい変形果を摘果しましょう。

「豊水」では、満開後120日頃(お盆頃)に、短果枝を重点的に小玉果、変形果、果その葉の無い果実を摘果します。なお、着果過多は樹勢低下や凍害(紫変色枝枯症)を引き起こす原因となるので、「幸水」に準じた着果量とします。ただし、過度の摘果は、「果形の乱れ」、「糖度が上がらない」、「果肉が軟化する」などの症状をおこすので、収穫まで数回に分けて摘果してください。

#### (3) 適期収穫

日照不足等によって果皮色よりも果肉の成熟が早まる恐れがあるので、収穫期の判断を誤らないよう留意し適期収穫に努めましょう。「幸水」では、果肉硬度や果皮色(全農作成「幸水」用カラーチャートで1.5~2が目安)の推移に十分注意して適期収穫に努めましょう。

#### (4) 病害対策

黒星病の越冬菌密度を低くするため、発病している果実や葉を摘除し、園外へ持ち出し適正に処理しましょう。また、秋季防除を必ず実施しましょう。

### 3 いちじく

#### (1) 新梢管理

日当たりの確保、風通しを良好にするため、副梢の整理を実施してください。なお、8月上旬以降は、先端から発生した副梢を1本残しますが、長く伸ばすと果実の着色が悪くなるので、5~6節目で摘心してください。

#### (2) 病害対策

疫病、黒かび病、そうか病の感染・発病が懸念されますので、8月中旬頃にZボルドー1,000倍、トップジンM水和剤1,500倍を散布してください。なお、黒かび病の発生が多い場合は8月下旬頃にロブラール500アクア1,000倍、果頂部のかびや腐敗が多い場合は収穫直前頃にランマンフロアブル2,000倍を散布してください。

## 【花き】

(現在の生育状況)

キクでは、8月咲の開花はやや早い傾向がみられます。降雨や日照不足の天候が続いたことにより、白さび病等の病害が散見されます。

その他、施設花きについては、やや軟弱徒長の生育となっています。

(今後の技術対策)

### 1 露地栽培

キクの白さび病、リンドウの葉枯病等の病害や、排水不良による湿害が発生しやすい条件となっています。

特に、9月咲きの切り花は仕上げの時期をむかえるため、定期的な薬剤散布に降雨前後の散布を組み合わせ、病害発生による品質や収量の低下を防ぎましょう。

また、出荷中の切り花については、葉や茎が濡れたまま梱包すると、ムレ等により輸送中の品質低下をまねきやすいため、十分に乾かしてから箱づめ・出荷しましょう。

### 2 施設栽培

- (1) 日照不足下では肥効が悪くなるので、過剰施肥とならないように注意するとともに、鉢花や苗物などは間隔を十分にあげ、不要な茎・葉を除去し、受光環境を整えましょう。
- (2) 晴天時以外は、できるだけ遮光資材を取り除き日照を確保しましょう。
- (3) 施設内の湿度が高いため、送風機などにより施設内の空気の循環や換気を図りましょう。